

ケシ

学名： *Papaver somniferum* Linne 科名：ケシ科



ケシはヨーロッパ南東部原産の植物で、5〜6月に花を咲かせます。日本ではアザミゲシやオニゲシなど様々なケシ科の植物を見ることができますが、今回紹介しているケシのケシ坊主から麻薬（モルヒネ・コデインなど）の原料であるアヘンの採取が可能です。そのため、日本では「あへん法」により栽培する際には厚生労働大臣の許可が必要になります。

アヘンといえば、歴史上有名な「アヘン戦争」を思い浮かべる方もいらっしゃるのではないでしょうか。清国（現在の中国）が、密輸によるアヘン蔓延に対して全面禁輸にし、イギリス商人の保有するアヘンを没収、処分したことでイギリスが反発し、1840年から2年間にわたり戦争になりました。アヘンに含まれるモルヒネは大量に用いると脳の機能が麻痺し、死に至ります。連用による習慣性が非常に高く、慢性の中毒症状を起こしやすいため麻薬に指定されています。鎮痛薬として古くから用いられていますが、未だにモルヒネに勝る鎮痛作用を示す化合物は見つかっていません。

ケシ坊主

ケシの未熟果実のことです。人為的に傷をつけ乳液を出し、乾燥、凝縮させてできたものをアヘンといいます。



生薬名 阿片（アヘン）

薬用部位 未熟果実の乳液

薬効 鎮痛、鎮静、鎮咳、止瀉作用

用途 鎮痛薬モルヒネの製造原料
アヘン末、アヘン散、アヘンチンキとして
鎮痛薬や止瀉薬に用いられる。



ウラルカンゾウ

学名： *Glycyrrhiza uralensis* Fisch 科名： マメ科

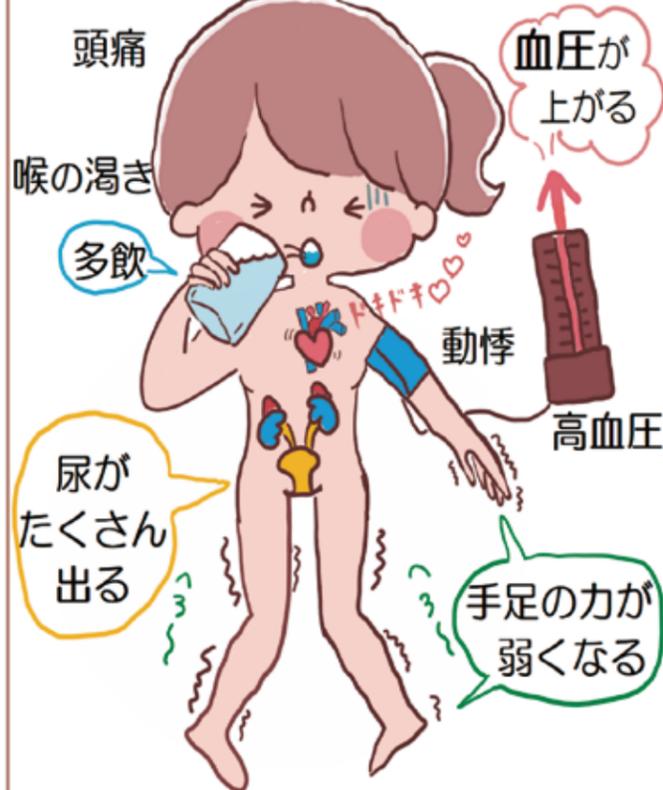


ウラルカンゾウは中国やアフガニスタンなど中央アジア原産です。根は縦に深く生やし、葉は奇数の羽状複葉で長卵形をしています。6〜7月に蝶形の紫の花が咲きます。根から得られた「グリチルリチン」は鎮痛作用や抗炎症作用があります。

「グリチルリチン」は砂糖の150倍もの甘さがあります。このため、ウラルカンゾウは様々な形で私たちの生活を支えています。例えば、醤油には甘味を加える目的で配合されています。また、生薬である「甘草（カンゾウ）」は他の生薬と調和させる目的で使用するため、漢方薬の7割以上に配合されています。

漢方薬に最も配合されているが故に1日5g以上の多量摂取によって、偽アルドステロン症を引き起こす事例が発生しています。気にならうのであればお近くの薬剤師にご相談下さい。

偽アルドステロン症の症状



生薬名	甘草（カンゾウ）	局方生薬
薬用部位	根、ストロン	
薬効	鎮痛、鎮咳、抗アレルギー、抗菌、抗ウイルス作用	
用途	鎮痛薬、鎮咳薬として漢方処方に配合される。甘草瀉心湯（カンゾウシャシントウ）、芍薬甘草湯（シャクヤクカンゾウトウ）など	



ニリンソウ

学名： *Anemone flaccida* Fr. Schm. 科名：キンポウゲ科



こちらの可憐な花は湿気がある山地や林で群生しているニリンソウです。1本の茎から2個の花が開くという意味で「二輪草」と名付けられました。実際は1〜3個の花を咲かせます。白い部分は花びらのように見えますが、ドクダミの場合と同様に萼（がく）です。また、一輪草や三輪草という植物もあり、茎に直接葉が付いているのが二輪草の特徴となっています。

4〜5月になると開花し、葉は茹でて山菜として主に東北や北海道で食べられています。しかしながら、ニリンソウの葉は猛毒のヤマトリカブト（キンポウゲ科）の葉とよく似ていて、生育場所も同じであるため、山菜採りに慣れている方でも注意が必要です。ヤマトリカブトを誤って食べてしまうと、口や手足のしびれなどを引き起こし、さらには痙攣や呼吸不全で死に至ることもあります。

ニリンソウの根茎が使われている生薬は地烏（ジウ）と呼ばれています。鎮静、鎮痛作用があり、民間療法としてリウマチの疼痛に用いられます。



生薬名	地烏（ジウ）
薬用部位	根茎
薬効	鎮静、鎮痛作用
用途	リウマチによる疼痛に用いられる。